

[要旨]

序論 「脱／文脈化」を思考する

大杉 高司

デリダは「署名 出来事 コンテキスト」で、オースチンの行為遂行的発話論が、舞台上での演者の発話を「不真面目」な発話とみなして、考察の対象から排除したことを批判していた。デリダにとって反復可能性こそが記号が記号たる条件であり、それが舞台上でなされた発話であったとしても変わりはない。さらにオースチンの「真面目」と「不真面目」の区別は、記号作用の分析において脱中心化すべき主体の「意図」を再導入するがゆえに、デリダには認めがたいものであった。この批判の重要性は疑うべくもないが、デリダがこの批判をどれほど「真面目」にしていたのかという問いは残る。デリダの「意図」に分け入らなくとも、デリダがサールの批判論文に再批判論文を執筆していること、さらにこの論争をめぐる批判的考察が哲学の分野で続けられてきたという文脈を探索すれば、彼の批判が「真面目」なものであったことを当てにすることができる。デリダに抗いつつ本論集が取りくむのは、私たちが「実践的な目的」をもって活動をするなかで当てにする、文脈の性質を解明することである。もっとも私たちは、文脈を同定するのに主体の現前に回帰したり、不動の慣習に依拠したりはしない。それは私たちが、主体帰属はむしろ文脈が要請するものであり、当の文脈も絶えざる脱文脈化と再文脈化の動態のなかにあると考えるからである。本論集の課題は、実践的な文脈の多様なあらわれの詳細に注目し、それを文脈化と脱文脈化の闘ぎ合いのなかにつまみとることにある。残る部分では、本論集の各論考の内容を紹介したうえで、それぞれがどのような相互関係を有し、今後の議論の土台となるどんな文脈を編み上げているかを提示する。